生命線に傷ひとつ

心香彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
生命線に傷ひとつ

【Ｎコード】
Ｎ９５１２Ｇ

【作者名】
心香彩

【あらすじ】
うまく生きたかった。あの人よりも、なんて高望みはしないから。せめて、人並みにうまく生きたかった。でも、私はそれすらできなかった。だから、決めた。きっと2ヵ月後に、私はみずから命を絶つのよ。生命線の寿命を短くして、私は、やり残したことをすべてやりつくそうと考えたのだが…。死に向かって前向きで、時々、後ろ向き。その先で、私が得たものとは。

第一話　うまくいかない

ひょっとしたら、もう４年くらいぼんやりと塞ぎ込んでいるかもしれない。
別に、深く思い詰めているとか、そんな深刻な状態ではないんだけどね。
ただ、漠然とした暗い気持ちをなんとなく手放せなくて、抱え込んでいるせいかしら。
私は、一人暮らしを始めて以来ずっと、この薄汚れた室内でみじめに沈んでいるわ。

だけど、そんな私も今年で２６歳になるのよね。
早かったな。３０もすぐそこか……。

なんだか、一段と気が重くなってきた。
だって、大人としての自覚がまるでないんだもの。
今でさえ無理しているのに、あと４年で、何をどう頑張れば３０歳の心構えができるって言うのよ。

そんなの、できっこないわ。

私には、見込みがないの。
２０を過ぎた時からすでにそうだったけど、
私って、精神年齢が実際年齢についていけてないのよ。
洗面所の鏡に映った私の身体は、何事もなく成長しているのにね。
その中身は１０代のまんま、成長がストップしたみたいで、大人らしい理解力がないの。
だって、普通の大人なら簡単にできそうなことが、私にはややこしくてうまくできないんだもの。

時々、年齢に追いつこうと必死に走ってみせるんだけど、なんだかそれもすぐに疲れちゃって、失速するとまた中途半端なところでゴロンって寝転んでだらけちゃうの。

そんな自分が情けなくて……。

「どうしたらいいのかしら？」って、毎回途方にくれちゃうの。

いっそのこと、

「ああ、もうどうしようもないな」って、高を括っちゃえば、こんなにも悩まずに済むのに。

なのに、どうしてかしら？

ドジで鈍くさいのは昔からだったけれど、私はそれでも一生懸命やろうと頑張ってしまうの。できもしないことを引き受けてしまうの。

そして失敗して、周りに余計な世話をかける。

いつもいつもそうなの。

仕事とか、先輩に怒られまいとして、頑張ってやってみせるんだけど、失敗してしまうの。

あれはいつだったか、

前に一度、社員の忘れ物を取引先に届けてほしいと同僚に頼まれたことがあったわ。

「これくらい楽勝だよね」と思われた簡単な任務だった。

なのに、私は電車の乗り換えに失敗して、知らない駅で迷子になっちゃったの。

その後で、やむを得ず社員の男性が迎えに来てくれたんだけど……。

私、その人に面と向かって言われたわ。

「こんなところまで戻ってくるんだったら、会社に取りに帰った方がまだ良かった」

すごくトゲのある言い方で、私は肩をすぼめると恐くて申し訳なくて泣いてしまった。

またある時は、商品のこまかい仕分けを任せられて、私は間違えないように丁寧に作業をしていたんだけど、

「あのさ、ずっとその調子でやっていたら、あなたどうなると思う？

朝になるわよ」

なんて先輩に呆れられて、結局は、手間を取らせてしまったし。

デパートでさんざん悩んで選び抜いた洋服だって、

「なにそれ、ババくさ～い」って、みんなに嗤われるの。

町中で外国人に話しかけられた時なんて、うまく英語を返せなかったせいで、あやうく怪しいところに連れて行かれそうになっちゃったわ。

「しっかりしなさいよ」って、そのたびに色んな人に注意されるんだけどね。

自分ではこれ以上にないくらい気を付けているし、頑張っているつもりなのよ。

それなのに、どうして？

「つもりって言った時点で、おまえには確信がないんだ」
上司にそうつつかれちゃう。
確かに、その通りよ。言いたいことはわかるわ。だけど、そんなこと言われたら、私、ますます自信がなくなってへこんじゃうよ……。

恐い先輩には、
「何度、注意してもミスがなくならないのね」なんて睨まれるし。
「同じ失敗をしてしまうのは、私の精神が大人として成長してくれないからで」
なんて言っても、そんなこと言い訳にならなかった。
「あんた、頭おかしいんじゃない？」って、険しい顔で首を傾げられたあげく、
「信用できないよ」とまで吐き捨てられたわ。

愛想を尽かされたのよ。
私の前を通り過ぎた先輩の蔑んだ態度なんて、まるで邪魔なハエを手で払うような仕草だった。

邪魔者は消えてよ。

そういう意味でしょう？
私、とうとう見放されたんだ。
これまでだって、本当は使いたくないのに、そこにあるから仕方なく使われていた身分だったんだもの。

こうなったら、もう、どうしようもないじゃない。

第二話　限界

最寄りの駅から徒歩で家に向かう帰りの路は、何のせいとは言わないけれど、いつもの三倍は長く感じたわ。
きっと心に激しく降る雨が、アスファルトの路を冷たく濡らして、私の足許だけ泥みたいにぬかるんでいるのね。
足をとめると、ずぶずぶとそこに沈んでしまいそうで、前に踏み出す足にもなぜか力が入らなくて、全然先に進まないの。

私は、それでも目の奥にあふれてくるものをこらえていたわ。そうしながら、重たい足をどうにか引きずってアパートの鉄階段を2階にあがったの。
だけど、うつむいていたせいね。
前から走ってくる足音に気が付いたときには、手遅れで、相手はもとから私のわきをすり抜けるつもりだったのかもしれないけれど、私が無駄に避けようと動いたせいで、肩の先がぶつかってしまった。
「ああっ、すんません」
その人は慌てて私を振り返ったわ。一段上の私と肩ごしに目が合った。大学生っぽい男の人だった。
うちのおとなりさんだ、と私はいち早く気が付いたわ。
でも、おとなりさんはどうかしら。もしかしたら気付く間もなかったのかもしれない。
彼は私の表情がよほど刺激的だったと見えて、私が怒っているとでも思ったのか、
「こわっ」と亀のように一瞬で首をちぢめると、私のリアクションも待たずに恐ろしい者から逃れるみたいに急いで鉄階段を下りていった。

だから、その後の私は不意打ちを食らった顔でぽかんとするしか

なかったわ。彼がブロック塀を曲がって見えなくなるまで立ちつくしていた。

待って。私が、何をしたっていうの？

口から出遅れた彼への問いかけはむなしく、宙を舞ったわ。

私は、何もしていないのに、人に害を与えてしまうの？

部屋に駆け込むと、私は、ひざを抱えてひとしきり涙が枯れるまで泣いた。

紫色の毒々しい悪夢にうなされて泣いた幼い頃の記憶を思わず呼び起こしたわ。

両親の寝室をたずねたこと、どんなに肩を揺さぶっても起きてくれなかった母のこと、独りだと感じた夜のこと。

私は、決めたわ。

だって、なんのために頑張っているのかわからないし、頑張るのも我慢するのも限界なんだもの。

……疲れちゃった。

頭が割れそうに痛いし、呑み込みたくないものを呑み込んでしまった時みたいに気持ちが悪いの。吐き気もするし、悪いけど、明日は仕事に行けそうにない。

ううん、明日だけじゃない、あさっても、しあさっても、二度と行きたくないの。

だから痛いけど許してね、わたし。

おとなりさんが寝静まっただろう、深夜。

私は右手にカッター・ナイフを握ると、左手にゆっくりと近付けて、ぷるぷると震え出したそのためらいをこらえて、覚悟を決めた。

生命線をスッと断ち切った。

ズキッとした鋭い痛みのあと、直線に切った傷口から、掌の上にじわりと鮮血が滲み出てきたわ。

といっても、掌の真ん中に切り傷ができた程度のことだから、出血はそれほどひどくない。

もとより、私が狙ったのは生命線のみだもの。ここで大出血を引き起こして死のうだなんて考えてないわ。

それよりもティッシュで掌の血をぬぐったら、思った通り、手首まで延びていた長い生命線が、皮膚の裂けたところでぷっつりとわかれていたわ。

「いい気味」

それは掌の上でやわらかな線のカーブを描いていたけれど、私ね、実はずっと昔からそれが疎ましかったの。

だって、

「あなたの苦しみはまだまだ続くのよ」なんて言われているみたいなんだもの。

その曲線を見るたびに私はいつもいつも嫌な気持ちにさいなまれていた。

不愉快だったのよ。

だから、私は傷口がジンジン痛み出してつらかったけれど、

長い生命線が掌の半分よりも上の箇所で、赤くにじんだ血によってくっきりと遮られたところを眺めていると、すごくせいせいして、心地よかった。

これで、いい。
私は、解放される。
きっと2ヶ月後に。
私は、みずから命を断つのよ。

死神でもないのに、私は掌にしるされた寿命を勝手に短くすると、そう決意した途端にどこからか、
「残りわずかな時間でやりたいことはすべてやりつくしてしまおう」
なんて、意欲がわいてきた。

皮肉なことに、私は目前の死に向かって、急に生き生きしだしたの。

第三話　死ぬまでにやりたいこと

今の会社は、翌日から行くのを辞めたわ。

正式に辞表は出してないけれど、

「今日で辞めます」って、電話でそれだけ伝えた。

理由は、一応考えていたけれど、いざとなると緊張して言葉がのどにつかえちゃって。

「だから、辞めます」としかやっぱり伝えられなかった。

上司は、驚いたようで、大きな声で聞き返してきたわ。

ショックを受けたからじゃない。

「まさか、おまえに辞める勇気があったとはなあ」って、語尾にせせら笑いが含まれていたもの。

でも、初めてだったわ。心から感心されたのは。

それから上司はすぐに事務的な話に移り、あれこれ煩わしいことを言い立ててきた。

だけど、ごめんなさい。

私には他にやるべきことがたくさんあるの。うんざりする電話は、携帯電話だったのだけど、枕の上に放り投げたわ。ああいうのは、勝手にしゃべらせておけばいいの。

あそこへはもう二度と行きたくない。

私はあらためて、そう思った。

もし仕事場にある私の荷物が邪魔だと言うのなら、段ボールにまるごと詰めてゴミの日に放り出してくれたらいいわ。こっちは、あと二ヶ月の短い命なんだから、誰にでもできる残務にかまってる時間はないの。そんなことのためにまた会社に出向くなんて絶対にイ

ヤ。
煩わしい手続きならそっちで勝手に済ませちゃってよ。
私は退職金もいらないんだから。死ぬ直前まで仕事と関わり合うようなことはさせないでほしい。
私の葬式にも来ないでもらいたいくらいよ。

私はそんなことをひとりでぼやきながら、コンビニの買い物袋から朝のおにぎりとペットボトルのウーロン茶と一巻きの包帯を取り出した。まずはウーロン茶で乾いたのどを潤して、それから包帯を不器用な手つきで左手にぐるぐると巻きつける。
これが、見事なまでに、不格好に仕上がったわ。
左手をぎゅっと握ると、切り傷が叫びたくなるほど痛かった。
でも、私はこの痛みと引きかえに、今日から老後の楽しみを味わうの。死ぬ前の余暇を楽しむのよ。
なんだか、気が急いてくるけど……。
でも、焦り？　というか、苛立ちなら一切ないわ。
吹っ切れたみたいでしょう？
でも、一日二十四時間って考えてみたら、結構、短いのよね。
少しは計画を立てた方がいいかしら？
私に残された時間はわずかだもの。勿体ない使い方はできないわ。
不思議なものね。一分一秒なんて、米粒程度にしか見てなかったのに、とても貴重に思えてくる。
これまで休日もそれ以外の日も、ほとんど自宅で眠ってばかりの半分寝た切り生活を送っていたのに、私の生活は一転して、夜更かしが多くなった。

別に、急を要す用事があるわけではないのよ。
ただ、時間を惜しむようにテレビにかじりついていたら、知らぬ間に夜遅くになってしまうの。
でも、無理はしてないわ。むしろ、心の底から夜更かしを楽しん

でいるくらいよ。
好きな番組を目に焼き付けるように観たり、
「いつか観よう」と思って、先伸ばしにしていた映画をレンタルショップでまとめて借りてきて連続で観たり、音楽番組で気に入りの曲をみつけると時間も構わずCDショップに走ったり、好きなことに熱中しすぎて時間を忘れてしまうの。

特に始めの内は、不安がちょくちょく頭にもたげてくるものだから、私は熱中することでそれらを振り払っていたところもあったわ。
できることなら、頭の中の雑念をすべて捨て去って、色んな感動で満たしたかった。ちょうど、からっぽのビンにきらびやかな宝石をいっぱい詰め込んで華やかな気持ちになる感じでね。満たされていたかったの。

昼間は、外にも出かけるようになった。
ずっと行きたいと思っていたのになかなか行けなかった場所って結構あるのよ。それに、雑誌で面白そうなテーマ・パークを見つけたんだ。遠方だから交通費が相当かかるんだけど、迷いなんてなかったわ。
だって、『いつか行ける日』なんて可能性、私に限っては有り得ないんだから、この期に及んで金に糸目はつけたくないわ。
『今』を逃したらもう行けない気がしたの。一生に一度のお祭りみたいなものね。
「この機会を逃したら大変、今すぐ行かなくちゃ」
なんて思い立って、私は即行で遊びに出掛けたわ。
タクシーに乗って、ゆうゆう一人旅だった。
運転手さんが静かな人だったから、お節介を言われることもなかったの。私は好きな時に休憩して、ラジオを好きなチャンネルに合わせてもらって、車窓の景色をのんびりと眺めたわ。

テーマ・パークでは、パレードにも参加して、まさにお祭り気分で楽しんだ。

それに、なんでかしらね、この土地に来るのもこれで最後なんだと思うと、案外どうでもいいような場所にまで足を延ばしてみたくなるものなのね。

特に何か、時間の制約があるわけでもないし、

「せっかくのチャンスなんだから。またとない機会なんだから」

なんて勇み立ってしまうと、旅するごとに寄り道が増えちゃう。

でも、私はそれを時間の無駄だなんて思ったりしないわ。もちろん、今が切迫した状況であることを理解した上でね。余計なことはしたくない気持ちよりも、後悔は残したくないという思いの方が差し迫って強いの。

だって私の場合、遊ぶ暇とお金はたくさんあっても、

「でも、また機会があるかも」

なんて思い直す暇はもうないんだから、どんなものにも飛びついていかなくちゃ損でしょ。

なんだか、死に向かう時間が、少しずつ私をやる気にさせていくみたいだった。

こんなふうに「なんでもやってやろう」なんて積極的な気持ちを抱いたのも、考えてみたら生まれて初めてのような気がするわ。

第四話　目に見えぬもの

その後、一ヶ月間はまるまる自由に過ごしたかしら。
私はそろそろ親に電話をかけてみることにした。
いつでも話せると思っていたから、ずいぶんと連絡を取っていなかったのよ。携帯ごしに久しぶりに母の声を聞いたわ。
「順調にやってる？」って聞かれたから、
「私は、順調よ」って明るく答えたわ。
だって、本当のことだもの。私は死に向かって順調に進んでるでしょ？
さすがに仕事を辞めた事実や、みずからの寿命を改ざんした事実までは言えなかったけれど、とりとめのない会話をして盛り上がったわ。
母と笑い合ったのは何年ぶりかしらね。
仕事に追われていたころは、面倒臭くて実家に帰る気も起きなかったけれど。

不思議と母に逢いたくなった。

よく考えてみたら、どこで死ぬのか、詳しい死に場所を決めてなかったじゃない。でも、私がわざわざ実家を選ぶとも限らないし、最後に一度くらいは実家に帰るべきよね。
私はそう思い立つとただちに、帰郷を決めた。
どうせだから、感謝の意をこめて家族がそれぞれ好きそうな品を手みやげに持って帰ることにした。

私のふるさとは、賑やかな町の県境にあって畑と建物が混在する、自然に囲まれながらも割合くらしやすいところなの。木造建ての実

家には、現在、父、母、弟、祖母の四人が共に暮らしていて、ことに祖母は死んだ祖父とも今なお、寄りそって生活しているらしかった。

私が実家に到着したのは夕方ごろだったわ。

だけど、その日は疲れていたせいか安心したせいか、どちらともわからないけれど、私は晩ご飯を食べるとすぐに眠くなって床に就いてしまったの。

おかげで翌日は、自分でもびっくりするくらい早く目が覚めたわ。大きなあくびをしながら、一階に降りたけれど居間にはまだ誰もいなかった。

早すぎたのね。

私は父と母を起こしにいって、母と一緒に朝食の支度に取りかかった。そこで私は肝心なことを思い出したわ。

急いで二階の部屋に戻ると、贈物の入ったずしりと重たい厚手のビニール袋を両手に提げて、下に戻ろうとしたついでに素通りするのもなんだから、となりの部屋の戸を無断で開けて、二つ下の弟を揺り起こした。

ものすごい剣幕で怒られたわ。枕を投げつけてくるんだもの。

どうやら、弟は夜勤明けでようやく眠ったところだったみたい。

私は慌ててビニール袋を床におろすと、おわびということにして弟の大好物と最新ゲーム機を顔の前に持ち上げた。

弟はたちまち顔色を変えて大喜びしてくれたわ。

「姉ちゃん、気が利くじゃん」だって。

現金な弟で助かったわ。

持ち上げた荷物も心なしか軽くなった。

その後、居間に下りると、祖母や両親にもそれぞれ大層な贈物を配った。

みんな笑顔で喜んでくれたわ。うれしかった—。

だけど、私があまりにもはつらつとした顔で、これからミュージ

カルの舞台にでも立つじゃないのかと思われるくらい陽気に振る舞うものだから、母は驚いて、まるで他人の子を見るような目を向けて、私を疑ってくるの。

こんなに明るい子だったかしら？　なんて言うのよ。

「向こうで愉快にやっているんですよ。ねえ、おまえさん？」

そう言ってくれた祖母は、私のことをうれしそうに眺めると、しわしわな顔をにこにこさせながら、となりの誰もいない座布団の上に私のあげたおせんべいをたむけていたわ。

それにしても。

私って、そんなに晴れやかな表情をしているのかしら？

鏡で自分の顔を見るのは、トイレを見るのと同じで、あまり好きではないのだけれど、でも、そうね、後でちょっと覗いてみようかしら。

実家にはその後も、三日間滞在することにした。

家族とは良い思い出をつくって一生のお別れをしたかったから、私はとにかくみんなの後ろに付きまとって、いい加減にうっとうしいと思われるくらいそばを離れなかったわ。

そこで、過去に恩を受けたことやうれしかったことを話題にして、今さら感謝の言葉を口にするの。

弟に「キモイ」なんて言われてとうとう部屋から閉め出されても、私は、

「もうこれっきりだから、保育園のころにやった宇宙船ごっこやろうよ」

なんて言って、戸の外から子供みたいにねだっていたわ。

別に昔に戻りたいわけじゃないのよ？

これは自分でもよくわからないのだけど、私はただ胸のあたりに

たまった熱っぽい感情を、誰かと一緒に分かち合いたくてしょうがなかったの。
だから、私がもうすぐ死ぬことを知りもしない家族が、私のことをまるっきり相手にしてくれなくなってからも私は、物事にあたるみんなの背中や一つひとつのしぐさや一人ひとりの顔を惜しむように眺めていたわ。

変ね……。この寂しさはさっきからなんなのかしら。

私は、縁談話を母から持ちかけられて機嫌を損ねたあと、行き場をなくして廊下をしょんぼりと歩いていたわ。
すると、日だまりがほどよくできた縁側で、祖父と肩を並べてひなたぼっこしているらしい祖母をみつけた。
ちょうど良かった。
私も仲間に加わって、くつろぐことにした。
祖母の右側に腰を下ろすと、靴脱ぎに足を投げ出して軽く伸びをする。
今日は、うららかな日和だわ。
祖母がほほえみをそえて、ほかほかの日本茶が入った湯飲みを両手で私に差し出した。
気持ちはありがたかったけれど、本当にありがたかったけれど、それは祖父のところに置かれた手つかずの湯飲みではなくて、自分が飲みかけた湯飲みでしょう？
あっちは祖父が口をつけたものだから、私が嫌がるとでも思っているのかしら？
「ねえ、おばあちゃん」
私はそれを受け取らず、祖母に訊いたわ。
「おじいちゃんは、事故で亡くなったんだよね。そばにいたおばあちゃんは、おじいちゃんの最期を見取ったわけでしょ？　おじいちゃんは最期になんか言ってなかった？」

答えによっては、同じ死にゆく者として参考になるかもしれないと思った。
「そうねえ……」
祖母はそう言って渋るように眉をひそめると、湯飲みを引っ込めながらゆっくりと前に向き直った。
「さようならとか、今までありがとうとか、照れることとか、なんか言ってなかった？」
「ずっと愛してるよ、ってかい？」
「そうそう！」それよそれ！
「まさか、ふふっ。この人は日頃からムスッとして愛情を示さない人ですからね」
祖母はそれを私にではなく、まるで左にいる祖父にわざと聞こえるような声で言ったようだった。
けれど、私には祖母がまだボケてもいないのに、独り芝居を続ける意味がずっと前からいまだに理解できなかった。
「そうなんだ。やっぱり、痛がってたらまともなこと言えないよね」
私は、ぬか喜びに肩を落とした。
祖母はうつむき加減で、ふふふ、とごく静かに笑ったわ。
口許を右手で隠しちゃって、まるで何かを思い出し笑ったようだった。そして、こちらにちらりと顔を向けて私に言うの。
「確かに、この人は昔から無口なかたですよ。女房の私にでさえ、泣き言のひとつもおっしゃらないんですから。周りには強い人だって思われていましたけどね。だけど、この人も最期は泣いて私に謝っていましたよ」
「え、なんで？」
意外だったわ。
「だって、事故はおじいちゃんのせいじゃないでしょう？」
「そうですよ。おじいちゃんは駅のベンチに腰を下ろして、私がお手洗いから戻ってくるのをじっと待ってらしたんです。この人にはなんの落ち度もありません。むしろ、私があんなところでこの人を

待たせたりしなければ、いいえ、それ以前に私が散歩に連れ出したりしなければ」
「やめてよ、おばあちゃん。どちらのせいでもないって、前に父ちゃんが言ったはずだよ。だって、悪いのはぜんぶ相手の男じゃない。朝から酔っぱらって、よりにもよって無人駅なんかに突っ込んできたバイクの方じゃないの」
私は、ついムキになったわ。祖母の弱気を吹き飛ばすためだった。
私たちは性格がどこか似てるのよ。だから、普段は内気な私でも、祖母にだけはこんなふうに強気な物言いができちゃうのね。
祖母はそれからしばらく黙って、湯飲みの中で揺れる影をじっとみつめていたわ。
縁側でひなたぼっこしているはずなのに、急に日陰が差したように湿っぽくなってる。

やがて日本茶も冷めたころ、祖母があちら側を向いた。
「おまえさん、この子に教えてやってもいいですか」
祖父にやさしく語りかけるような口調だったわ。
果たして、祖母の目に映っている祖父は快く了解してくれるのかしら。
どうなの？
「おばあちゃん」
私が一声うながすと、祖母はようやく私を振り向いた。まるで今の今まで祖父と楽しくじゃれ合っていたみたいなほがらかな笑顔をたたえているわ。
そして、にこりと笑った顔を庭にやると祖母は、横顔にどことなく哀愁をにおわせて、右手の拳をぎゅっと握った。
「あれはつらいから、私の心に閉まっておこうと決めていたんですけどね。この人が、ええよって許してくださったから、あなたにだけは内緒で教えますね。

あの日、あなたのおじいちゃんはね。自分の身体を少しも気遣わずに、それどころか膨れたまぶたを血と涙で濡らして、私にこう謝ったんですよ。

『滝子、すまない。わしはもう死んでしまいそうだ……。すまない。ここまでだ。一緒にあちらへ逝ってやれなかったなあ、滝子―』。

自分はどんなにか苦しかったろうに、この人は私の手を握り返すと寂しそうな声で泣いてね。すまないって、謝っていたんですよ」

さようならとか、ありがとうじゃなくて。自分が先に逝くことを祖父はひたすら謝っていたと、祖母はいう。

なんで？　って、私は心の中で思った。

祖父は、祖母と一緒に死ねなかったから謝ったの？

違うわ。

違う。そうじゃない。

おじいちゃん、そうじゃないでしょ？

おじいちゃんは、もっと生きたかったんじゃないの？

おばあちゃんともっと一緒に生きていたかったんじゃないの？

だから泣いたんでしょ？

私は胸が高ぶるのを感じた。

「おばあちゃん。それってつまり、おじいちゃんが―」

おじいちゃんが。

私はそのあと何を言おうとしたんだろう。わからない。ただ、口に出そうとした瞬間に無性に悲しくなって、両目から涙をぽろぽろとこぼしていた。

祖母は横にいる祖父を気にしてか、私の肩に寄りかかると私の耳に右手をあてがって、続きをそっと話してくれた。

祖母はそれで知ったらしいの。

ふたりが若い頃に交わした、「死ぬときも一緒だ」というたった一度の約束を祖父がずっと憶えてくれていたこと。

祖母は最期の最期に知ったの。そのことが祖母にはうれしかったみたい。

だけど、それ以上につらい気持ちや後悔が胸いっぱいにあふれたんだって、私に教えてくれた。
「当時は、もう愛されていないと思っていましたからね。実はずっと愛してくれていたのかもしれないと後で思い直してみたら、この人の気持ちにも気付かず、私はただ疑っていた。そんな自分が情けなくてねえ」
悔しかったんだと思う。
だから祖母は、祖父が亡くなった今も祖父を忘れることができずに独り芝居を続けているんだ。
あるいは、天国へ一緒に逝くつもりで、祖父の魂がいまだ現世に漂っていると信じているのかもしれない。
それなら、本当に祖父がとなりにいるのかもしれないわよ。
私にはそう思えてきた。そう思いたかった。
それから、となりで涙目になった祖母を見て、祖母はすぐに顔を伏せて服の袖をあてがったけれど、私はつい想像してしまった。
私の亡骸の上で同じ言葉を吐き出し、泣いてしまうだろう祖母の姿を—。
祖母は、いつの間にかあちら側の床に手を置いて何かをやさしく握っているようだった。
けれど、それは考えるまでもないわね。
祖父の手を握っているんだわ。そこに見えるの。うなだれた祖母の肩をそっと抱き寄せている祖父の姿が、私にも見えるの。
私は色んな意味で身の置き所がなくなって、立ち上がった。
「あなたは気付いておあげ。愛は見えぬものだけど、いつもそばにありますからね」
それを忘れてはなりませんよ。

背を向けた私の心に、祖母の言葉がいたく突き刺さった。

第四話　目に見えぬもの（その2）

おばあちゃん。
私、おじいちゃんの話を聞いて、あれからちょっと考えたの。
人の魂には、おばあちゃんのいう目には見えないものが手を伸ばしていてさ、
私たちの気付かないところで何かを引き寄せたり、手放したりしているのかもしれないなあ、って。
だから、
もしもよ、私が死んで、悲しんでくれる人がいるのなら、その人は少なからず私を愛してくれていたんだろうね。
生前、となりどうしで結ばれていたんだろうね。
それなのに、私はそのつながりを勝手に断ち切っておいて、その人に迷惑がかからないわけないよね。
私のとなりで支えてくれていたその人はきっとぐらついて、崩れちゃうよね。
「あなたを愛していたのに、伝わらなかったの？　私の力が足りなかったの？　では、どうしたら良かったの？」
なんて思い詰めてしまうかもしれないね。
そうしたら……。
そうしたら、私こそどうしたらいいんだろうね。
きっと、死んでも死に切れないよ。

ごめんなさい。
私の命は私だけのものじゃなかったんだ。
自分を愛してくれる人よりも自分が先に死ぬってことは、それだけで罪なことなのかもしれない。
それに気付いた私は、罪悪感とともに家族に対する愛しさが急に

あふれてきた。

ううん、家族だけじゃないの。

いつの間にか居間から移動させたらしい、玄関の角に放置された古いはしら時計や、

二階に上がる時に足許できしんだ階段の、ギシッという、貫禄をおびた響きや、

部屋へ向かう途中の廊下で、壁の下方に残されたままになっているこれは兄の絵だとか、弟の絵だとか、昔から大掃除のたびに言い争われてきた幼稚なラクガキや、

部屋の扉にかかったうさぎさんのネームプレートや、埃のかぶった勉強机や、引き出しのなかの懐かしい品々や、

カーテンに飛びはねた絵の具のシミや、窓から見える広い庭や、小さなチューリップ畑や、

かつて慣れ親しんだものたちが、かつての思い出をそっと呼び起こして、みんな愛しく思えてくるの。

もう夕暮れ時だったけれど、私は外にも出てみた。

道を挟んだ向かいの空き地が野良猫のたまり場になっていて、小さな子猫が二匹で母猫とたわむれているのを見たわ。かわいらしかった。

私はそれを横目に、一本道を進んで、居酒屋の前を通りかかった。三十代ぐらいの女の人が短いホウキで腰を曲げて、軒下を掃いていたわ。

私は妙に親近感が湧いちゃって、微笑んでそこを通り過ぎると、買い物帰りらしい近所のおばさんとばったり出会ってね、

「こんにちは」なんて挨拶を交わした。

その時、横から帰路を急ぐ小学生たちが駆け足で私を通り越して

いってね。
彼らを振り返ると、不意に気持ちのいい風が吹いてきて、私の頬を撫でるの。
《おかえりなさい》なんて言葉を私にささやいて、とどまることなくまた向こうへ飛んでいってしまったわ。
だから私、忘れないでねって心で叫んだの。
それからさらに一本道を進んで、私は民家が途切れたところで、はたと足を止めた。
左側の視界が開けたの。町の風景を見渡すことができたんだけど、これがまた素敵で、
遠くに見える県道沿いの山林や白壁の工場、まばらな民家、一面に広がる田圃が、
茜色の透けたベールにやさしく包まれているみたいでおぼろげなものに映ったわ。
セピア一色のパノラマそのものね。
気付けば、足許の一本道にもオレンジ色のカーペットが敷かれているし、
なんだか、あたたかく彩られた空までもがとても大切な存在に思えてきたわ。
きっと、地球上にあるものすべてが素晴らしいものをやどしているのね。

私は一本道のわきを下りると草はらにしゃがんで、遠くの山をみつめたわ。
気分はとても穏やかだった。
膝を抱えて静かに目をつむるとね、青い大地のにおいがするの。
それを吸い込んだ私の身体なんて、ふと透明な空気に溶け込んで風に流されて消えてしまいそうだった。
あるいは、それもいいかもしれないわね。そうして自然消滅できるのなら、私は幸せよ。

ゆっくりと流れる時間に呼吸をあわせて、私は何も考えず、ただ眠るように自然に身をゆだねてみるの。
そうして期待して、身体が軽くなったと感じたところで、実際は、消滅することなんて不可能なんだけれど。

それでもちょっとは、自然に優しくなれたのかな。
ここに来る前までは、親に恩返しするつもりで頑張らなくちゃ、って意気込んでいたけれど、それって、考えてみたらつまらない意欲だったわ。
だって、あえて頑張ろうとしなくても、自分がやさしい気持ちで満たされてさえいれば、人にも自然と親切になれるんだもの。
意気込んでやる必要なんてなかったんだわ。
私は不器用なりに自分にできる行いをしたの。そうしたら、そんなに大したことはやってないんだけどね。
「成長したわね」なんて母にほめられたわ。
なんだか照れくさかったけれど、ちょっとだけうれしかったな。

帰りの電車で、泣けてきた。

第五話　目前のタイムリミット

始めのころは、浮かれていたんだ。
生きる苦しみから解放されて、のどやかな自由の風を感じてね。
思う存分やりたいことをやりまくって、私は遊びほうけてた。
だけど、実家から帰宅して、ふと立ち止まってみれば、部屋の壁に飾られたカレンダーが目に入って、私は一気に酔いが醒める思いがしたわ。
カレンダーの日付にマークされた赤い×印が半分以上も埋まっているの。
あの日から、指折り数えるみたいにして、毎日つけていたマークよ。
私はそれを忘れていたわけではないけれど、急に現実を見せ付けられたようで、ぞくっとしたわ。
おそるおそる今日の日付から決意した日付までさかのぼって、マークを数えてみた。
そうしたら、私の余命が残り三週間を切っていることがわかったの。
なんだか、切ないため息がこぼれたわ。

おかしいわよね？

ずっと待ち望んでいた「死」が、後もうちょっとで手が届きそうなくらい間近に迫ってきたっていうのに。
とうの私は、全然うれしい気持ちになれなかった。
部屋の隅で出しっぱなしになっている敷蒲団に、ばたっと倒れ込むと、
私は二ヶ月前に忘れたはずの暗い吐き気をそっくりもよおして、急に気が滅入ってきた。

……すがすがしい青天の日に悪いんだけどね。とても青空を見られた気分じゃないのよ。

私は、かけ布団を頭まですっぽりと被ると、いつまでももぐっていたいどん底の気分に陥った。

でも、そうして閉じこもっていても、未来からは逃げられないってこと、わかっているの。

私はかけ布団から顔を出すと、左手を顔に近付けて、掌につけたあの日の傷跡をあらためて確かめた。

腫れはだいぶ薄らいだみたいだけど、薄紅色の直線が物々しく残っていて、生命線をぷっつりと隔てている。

はあ、って。またため息がこぼれた。

いつからだろう。

一ヶ月前までは死ぬことを夢見てたくらいなのに。

残りわずかな寿命を心から楽しもうとこれまで跳ね回ってきたせいか、

もっともっと遊んでいたい欲求が心中で次第にふくらんで、これまで感じた満足感とともに、「死」に憧れていた私のいつかの願望をすっかり呑み込んでしまったみたい。

ああ……どうしたらいいのかしら。

私は頭を抱えたわ。

選択肢なんて始めからひとつしかないというのに。

私は、不安で不安でたまらなくなった。

にもかかわらず、カレンダーに×印をつける習慣はそれからも毎日かかさず続けるものだから。私って、本当に救いようがないわ。

死に迫る恐怖を自分の肌でひしひしと感じながら、自分で自分を死に追いやっているんだもの。

第五話　目前のタイムリミット（その２）

最後の一週間は、恐かった。とてつもなく恐かった。
ゴールデン・タイムに面白いお笑い番組がやっていたんだけど、日本中が笑い転げるような爆笑ネタが披露されても、私は上の空でそれを観ていたからまったく笑えてこなかった。
頭の中ではまるで別のことを考えているの。
「さあ、どこで死のうか」
なんて物騒なことを考えているの。それにあわせて、手段もどうするべきか考えなくちゃいけないんだけど……。
痛みとか苦しみとか、事後、死体になった自分を想像すると、どうしても細かいことまで気にしちゃって、煩わしくて計画がぜんぜん先に進まないのよ。
結果、布団の上に寝転がって、翌朝を迎える。このパターン、今日で何日目かしら。
しょせんは、おつむの弱い私だもの。うまくいきっこないわ。
できるものなら、うまく自殺を遂げた前任者たちにアンケートを取りたいぐらいよ。
『あなたの死に方を詳しくお聞かせください』なんて前書きしてね。
ほんと、馬鹿みたい。もう、嫌だ。焦りと不安とで、胸の奥から苛立ってくる。
このもやもやとした感情、言葉には表せないんだけれど、会社にいた時とまったく同じもどかしさを全身に感じるわ。
結局は、同じことなのよ。
生きようとすることも面倒臭いことで、死のうとすることも面倒臭いことなの。
それならいっそのこと、このまま一生、《生と死のはざま》で漂っていたかった。
神様、ねえ許してくれるでしょう？

私が手を合わせて、そうおねだりしてみたところで、
死神、あなただけはこちらを冷ややかな目で睨んで、願いを聞き入れてはくれないんでしょうけど……。

そう、わかっているの。
あの日、自分で刻んだ約束だもの。

私は、布団の中でしょぼくれると、その日は珍しく眠らずに死ぬことばかりを考えていた。
約二ヶ月間、うきうきと過ごしていた私がうそのようだった。
あの晴れやかな気分はすっかり消え失せて、かわりに重苦しい不安がいつまでも私の胸を締めつけていた。

第六話　死神の訪問

死の前日を迎えた。

これは、私の気のせいかもしれないけどね。

さっきから朝のニュース番組を観ていて、なんだか死神に見張られているようなどことなく威圧的な視線を真横から感じるのよね。

もちろん、単なる気のせいだとは思うんだけど。

それでも、私がちょっとでも腰を浮かせようものなら、黒ずくめの死神が柱の陰から、バッと飛び出してきて、

二メートルはありそうな大きなカマを振り上げて私の首を―、っていう、不吉な予感がするから、怖くて動けないのよ。

だって、人の意表を衝くのが神様の仕業ってところがあるじゃない？

まあ、明日死ぬつもりの人間が、何を今さらびくびくしてるんだって話にもなるんだけど……。

私は、怯えずにはいられなかった。

きっと催促に来たんだわ。

『見ておるぞ』って、

人相の悪い死神が、まるで借金取りみたいに柱の陰からこそこそと窺っているんだわ。

「それなら、わかってますから。ちゃんと実行しますから、明日まで待ってください」

私は心中でそう訴えかけたわ。

そして、たぶん、思いは通じてくれたと思う。

さあ、もういいかしら？

立つわよ？

私はずっと我慢していたから、周囲の気配が穏やかになったのを

窺うとすぐに立ち上がって、トイレに駆け込んだ。

その晩は、目が冴えてなかなか寝付けなかった。
といって、死ぬ前に眠ろうとする私もおかしいんだけど。
でも、今は何もやりたくないし、何者からも目を逸らしていたいの。
私は恐いから部屋の照明を付けっぱなしにして、頭まで布団にもぐって眠ろうとした。
けれど、内なる恐怖心が鼓動をドキドキと早めておさまってくれないのよ。
私は、暑苦しくなってやむなく布団から顔を出したわ。
頬に触れるさわやかな空気が、涼しかった―。

突然、まぶたを開いた。

あれ？　って思ったわ。
だって、身体が硬直しているみたいで、ぜんぜん動かないんだもの！
これは、世にも恐ろしい金縛りだわ。
私は慌てて叫ぼうとした、けれど、口からは息すら出てこなかった。
部屋を明るくして安心していたのに―。
私は、動かない両手をなんとか広げようとして、うんと力んだわ。
まるで棺に押し込められたかのような密閉状態を感じながら、力いっぱい無駄な抵抗をこころみたの。

すると突然、頭上に何者かの気配を感じて、私はハッとした。
いつの間にか、目前に黒いビロードが垂れていたわ。

まるでカーテンみたいにひらひらと揺らめいて、私の鼻先をかすめるのよ。一気に、体中の血の気が引いた。

―死神だ！

二十四時が過ぎて、私を殺しに来たんだ。

死神は、私を見下ろすように枕元に立っているのか、

私はオーロラのようなビロードに視界を邪魔されていたから、その姿はあごの先端すらわず　かも見えなかったけれど、ただただ不気味なほど静かで恐ろしかったわ。

そしてまもなく、暗黒のビロードが顔の上にかぶさったの。

私はたちまち驚いた。

死神がしゃがんだのよ！　私は、心中で悲鳴を上げた。

そして、確かに聞いたの。

『時間だ』

と太い男の声がした。頭の奥で響いたの。脳に直接、話しかけられた感じだった。

私はあまりの恐怖におののいて、水中でもがくようにしてビロードを両手で払いのけたわ。

そして、がばっって跳ね起きた。

照明の光が目にまぶしかった。

私はまたたきをして、それから背後を見回したけれど、黒い影は忽然と消えていた。

これは、どういうことなの？

額には冷や汗をかいているし、心臓もバクバクと音を立てている。

まだ私は生きているみたいだけど、今のは何？　夢だったのかしら？

私は呆然として、とりあえず目覚まし時計に目をやった。

いわゆる丑三時だった。
……私の魂を刈りに来たのかしら？
なあんて、まさかね。

第六話　死神の訪問（その２）

だけど、本当に死神がいないとも限らないじゃない。

それからの私は、いつまた立ち現れるかもしれない死神に怯えて、眠らなかった。

かけ布団を目の下までかぶると、

板張りの天井の隅の方をぼんやりとみつめながら朝になるまで、色んなことに思いを馳せていた気がする。

たとえば、「マラソンで最後まで走り抜いたことなかったな」とか、

「上司に放たれた最終警告」とか、

「会社でよくすれ違った紳士的な彼が、エレベーターの閉まる扉を押さえてくれた、たった一度のことが忘れられないのよね」とか、

「お気に入りの芸能人が結婚したときは、なんで涙が出てくるんだろうって思うくらいショックだったな」とか、

「自転車の立ちこぎをする兄の後ろ姿」とか、

「私はまだ幼くて後ろから追いかけるのが必死だったな」とか、

「実家でみんなと笑いながら食べた夕飯はおいしかったな」とか、

思い出せば切りがないくらいあふれ出てくる記憶の断片を、私はひとつひとつ取りすがるようにして、ひたすら懐かしんでいたわ。

気づくともう朝になっていた。

窓辺にはすっかり陽が差して、すずめのさえずる声を聞いた。

私はようやく布団から半身を起き上げたわ。

涙が頬を濡らしていた。

最後の、朝か……。

私はことさら笑って涙をぬぐうと、何か思い残したことあったかなって、今一度、思い返してみた。
だけど、もうその必要もないわね。
思い残したことなんて山ほどあったわ。
この二ヶ月間で、何かやり残すことがないようにやりたい放題やってきたのによ。
皮肉なことに、なくそうとすればするほど、かえって捨てがたいものに気付いて、未練を増やす結果になってしまったの。
私は、今度のことで思い知ったわ。
きっとこの世界は、目を凝らせば本当は素晴らしいものにあふれていて、またどんどん増え続けているんだと思う。
だから、《死ぬまでにやっておきたいこと》なんてこれから先も年を重ねるごとにもっともっと増え続けていくわ。
いくら千歳まで長生きしたって、やり残したことも思い残したこともなくなりはしないのよ。
きっとそう。
若くして死のうが、年老いて死のうがやり切れない気持ちはそんなに変わらないの。
それがわかったことが、今から去りゆく者として、せめてもの救いになるかもしれないわね。
……負け惜しみとも言うんだけど。
私はひざを引き寄せて体操座りになると、後ろの大きな窓に身体を半分振り向けた。
外の景色を眺めるでもなくたしかめる。
そこには当たり前に広がる青い空や白い雲があって、民家の屋根やビルが遠くまで続いている。
これを見るのも最後なんだな。
そう思ったら、私は目の奥にぐっと込み上げてくる熱い涙をこらえることができなくなった。
何もかも、今日が最後なんて。

お別れなんて、つらいよ―。
今すぐ、今すぐ実家に帰りたいと思った。
実家に帰って、父や母や弟や祖母に逢って、東京の兄も呼んで、居間で輪になって楽しくおしゃべりがしたいの。
みんなの顔が見たいの。うれしそうに笑っているみんなの顔が見たいの。ダメな私を、
「しょうがないな」なんてあきらめ顔で笑って、
いつだって助けてくれたあの安らかな場所に帰りたいの。
行けるものなら今すぐにでも、飛んで帰りたいよ。ふるさとまで。
きっと歓迎してくれるわ。
きっと。
家族が。

あっ。

ううん、でも……。
ちょっと。
やっぱり、どうかな……。
やさしい父はいいとして、もし兄に怒られたらどうしよう。
会社に詫び入れて来いよ、なんて頭ごなしに言われたらどうしよう。強情な兄のことだもの。可能性はあるわ。

―もう嫌だよ、そんなの。

あそこには二度と戻りたくないんだから、働きたくないんだから、現実はそんなに甘くないんだから、
もう私のことは、ほっといてよ！
私は家族に抱きすがりたい思いを抱える一方で、おっかない不安を抱いた。
だって、本当に歓迎してくれると思う？

「これからどうするのよ」
なんて責められちゃうわ。
そんなことまた考えたくない。私には生きていく勇気がないのよ。
私はやわらかな掛け布団に顔をつっ伏すと、そのまま口を塞いだ。
本当は睡眠薬を大量に飲んで自殺する予定だったけれど、それは手に入らなかったの。
だから、息を止めて死ぬことにするわ。
すごく本気だった。けれど、私は五十秒もしない内にどうにも息苦しくなって、プハッと顔を上げた。
はあはあ、と息を荒げる。
ダメだ。こんなんじゃ、死ねない。

私は大きな窓を振り返ると、立ち上がるなり窓を開け放して、太い窓枠に飛びついた、
ものの、半身を乗り出したそのままの恰好で一時間くらいは馬鹿みたいに立っていたかな。
時々、思い出したように掌の傷跡を、ぼーっとみつめては二ヶ月間の楽しかった記憶を思い起こして、何も行動に移せなかった。

この臆病者。
私は自分をののしったわ。
だって、いつもそうなんだもの。最後までしっかりとやり抜いたことなんてなかった。
途中で投げ出したり、途中で誰かの手を借りたり、途中でやめざるおえなくなったり、途中途中ばっかりで、だらだらな人生を歩んできたのよ。
人生の最期くらい、しっかりと決めなくちゃ。

あの死神も後ろで見てるわ。
背後にぴりぴりと感じるのよ。闇のように形のないビロードをま

とった死神が、今日のために研いだらしいカマを両手にきつく握りしめて、
私の背中を押したくてうずうずしながら待っているの。
でも、黙って見守っていてよ。
私は自分の力で飛び降りるの。今度こそ、自分の力でやり遂げてみせるんだから。

窓から顔を出して見下ろすと、高さは、十五メートルくらいありそうだった。
固そうな地面と、頭を打つのにぴったりのブロック塀が横にある。
うまくゆけば、即死。失敗すれば、強烈な痛みに歯を食いしばりながら死ぬことになりそう。
どうか、死神さん。
私を苦しめるようなことはやめて、うまく飛べますように、私にお力添えをください。一生のお願いです。

私は裸足でこわごわと窓の桟に乗り上がると、
危なげな前傾姿勢で小刻みに震えながら、胸いっぱいに空気を吸い込んで、窓枠から両手を放した。
死神がにたりと笑ってカマを振り下ろしたのはその直後だったのかもしれない。
私は気を失うのと同時に強張っていた全身の力がふっと抜けて、前にゆっくりと倒れていった―。

きっと、誰にも知られず、
地球にあるものすべてに見取られず、
あっけなく、

私の身体は、地上に落下した。

第七話　私の選んだ道

目を覚ますと、私はまぶしい光のなか、病室のベッドに寝かされていた。

えっ？　って感じになったわ。

もうわけがわからないの。

頭がひどく混乱していて、ここはどこ？　私はだれ？　みたいな状況よ。

しかも私の首や手足には白いギブスが取り付けられ、体が完全に固定されていたから身動きが取れないの。

私は一層の恐怖を抱いて、パニックになったわ。

金縛りの恐怖を思い起こしたの。

だけど、あの時と違ったことがひとつあった。それは、叫ぶことができたこと。

事の説明は、その後、病室に駆け込んできた看護婦から聞いたわ。

そして驚いた。

まさか、自殺が未遂に終わるなんて。

私はあの時、二階から真っ逆さまに飛び降りたつもりだったけれど、反射的に身をかばったせいで、打ちどころがよくて助かったみたい。

となりに住んでいる男子学生が通報者だと言うから、きっと、ドサッという音にびっくりして、窓の下を見たのね。

私は倒れているところを苦手なその人に発見されて、救急車でただちに病院に運び込まれたらしいの。

まったく、ついてないわ。

せっかく勇気を出したのに、何をやってもうまくいかないんだから……。
私がそう嘆いていると、
ベッドのわきでカルテに何やら書き込んでいた医者が、ボールペンをパチンと弾いて、
それを胸ポケットに挟みながら私にちくりと言った。
「あなたは残念なことに自分がいかに幸運であるか、ご存じないようだ。
いや、そうか。幸運の持ち主はひょっとしたら、あなたを発見した男性のほうだったのかもしれませんね」

私は、は？　って顔になった。
だってあの人は、私の不幸、というか、こんな惨事に巻き込まれたのよ。
「幸運だったなんて思ってませんよ、あの人は。
今頃は、不幸にあったと友達に嘆いてますよ、きっと」

不満顔の私に対して、医者は、しかしちょっとおかしがるように頬をゆるめた。
「男性は戸惑っていたそうですが、嘆いていたとは聞いてませんね。
それに、救急車が到着するまでの間、指示された応急処置を懸命におこなってくれてましたよ。あなたはそのおかげで助かったようなものです」
息を吹き返したのは奇跡だ、と医者はおしまいに付け加えた。
それはつぶやくような声だったけれど、私は聞き逃さなかった。
驚いてこう聞き返したわ。
「私はそれじゃあ、死んだんですか？」って。

「え、死んだ？」
医者はいきなり突拍子もない質問をされて、理解ができなかった

みたい。
一瞬まの抜けた表情をみせたけど、すぐに平静を取り戻すとため息まじりにこたえた。
「まあ、そうですね。三途の川を渡る一歩手前だったと思いますよ」
「……」
三途の川を見物した覚えはまったくない。
でも、私は死んだというのね。
なぜか急に、自分自身を遠くに感じるようになった。
知らぬ間に幽霊になって、幽霊の気持ちのまま現実に戻された気分よ。

医者はやがて、病室から出て行った。
でもさっき、扉をガラリと引き開ける際に、
「やっぱり、これだけは言わせてください」と私を振り返って言ったわ。

「あなたは、今まで谷底を覗き込むようにして生きてきたのでは？
だから、とうとう谷底に落ちてしまったんでしょう。
運よく、命はとりとめたようですが。
これからは、どうするんです？
空を見上げて生きていくしかないんじゃありませんか？　たとえ、そこから這い上がれなかったとしても」

第七話　私の選んだ道（その２）

これからはどうするんです？　　か、言われちゃったな。

なんでだろ。

なんで、私は生き返ったんだろ。

なんで、そのまま死なせてくれなかったんだろ……。

私は視線の先にある白い天井にそう疑問をぶつけながら、左手にある例の傷跡を頭に思い浮かべて、

「私は、死ぬ予定だったでしょう？」なんて、ほかでもない死神に問いかけていた。

だって、こんな理不尽なことってある？

死神は何を思って、私のよみがえりを見逃したのかしら。

まさか、私の魂を刈り逃がしたの？

なんて思ってみたりもしたけれど、そんなヘマをするのは私ぐらいなものよね。

だいたい、居もしない死神の腹心を探ろうとすること自体、馬鹿らしいことなんだもの。

やっぱり、馬鹿は死んでも直ってないわ。

私はため息をついて、おとなしく眠ろうとした。

けれど、閉じたまぶたの裏では、掌の傷跡をついつい想像してしまい、想像内にある右の人差し指で、傷の入った生命線を上から下になぞっては、

どうして生き返ってしまったんだろうとひたすら不思議に思っていた。

傷跡で途切れた生命線。それが傷跡の下にもまだまだ続いている。

本当につくづく長い生命線よね。切断することで命を絶てると思っていたのに……。

あっ。

でも、ちょっと待ってよ。

この傷跡が死を意味するのなら、その後で再開する生命線が意味するところは―。

あー……。

うそでしょ？

そうなのね。

そういうことだったのね。

わかった気がした。

《その後で再開する》

私は傷跡を越えて、新たなスタートを切ったんだわ。

そのことに気づいたら、突然、私の胸に激しい感情が沸き上がってきた。

それがなんなのか。喜びなのか、怒りなのか、私自身にも判別できない。

あるいは、両方あるのかもしれない。傷だらけの身体で、後遺症が残ることもわかっているの。

だけど、喜びは……。

ちょうどその時、病室の扉がノックされて、

「失礼します」とひとりの看護婦が入ってきた。

首は動かせなかったけれど、声が特徴的だったから先程とは別の看護婦だとわかったわ。

ベッドの横に来るとたちまち私と目が合って、彼女は、良かったとほっとしたように笑んだ。
一見して、若く、かわいらしい人で、
私はなぜか、何日か前に空き地でみつけた子猫たちのことを思い出した。そんな顔立ちをしているの。
彼女はどうやら、私の様子をうかがいにきたみたい。
私の身体を包帯でぐるぐる巻きにしたのは、実は私なんですと教えてくれた。
非常にどうでもいいことだった。
彼女の名前だって、ほらもう忘れてる。

「あなたのご両親、ものすごく心配なさってますよ」
ああ。
「聞いてます」
私はついぶっきらぼうになってしまった。
しかし彼女は、まったく動じなかった。さらにいたずらな笑みを浮かべて続けるの。
「でも、こちらへいの一番に駆けつけていらっしゃったのは、お兄さまなんですよ？
私、そのとき偶然、近くにいたんですけど、もう、びっくりしました。
あの方、受付のところに割り込んで来るなり、あなたのお名前を叫んで、
『頼む！』なんていきなり言うんですもの。
たぶん、場所を聞きたかったんでしょうけど。
仕方ないですね、
色んなことが頭の中でごっちゃまぜになっていたんだと思います。
ほんと、焦っているのが、目に見えてわかりましたから。
すごく青ざめた表情なのに、真っ赤な顔で汗ばんでらっしゃるんですもの。

こんなふうに言ったら失礼ですけど。
私、もしかしてこの人、駅からずっと走って来たのかな、なんて思っちゃいましたよ」
彼女はそう言って、笑った。

私は、目が点になった。
にわかには、信じがたい話だった。
いつも屁理屈ばっかり言って、
幼い私を平気で置き去りにするようなイジワルで、冷酷なお兄ちゃんだったから。
青ざめてる顔とか、まず想像ができなかったわ。

「やさしいお兄さまなんですね」
と彼女に言われたときは、違いますよって言いそうになった。

けれど、そうやって見上げた私に、彼女は目を細めてにっこりとうなずくの。
「連絡を受けてすぐに、東京から駆けつけてくれるなんて」
愛されてる証拠じゃないですか、って、感情を込めて言うの。
なのに、なんで死のうとなさったんですか？　ってきかれるかと思ったわ。

けれど、彼女は、私から窓の外に目を移すと、
まるでそこのところに私の兄が映ってますよと言わんばかりにそっと私に目配せをした。
私は、だから、そちらへ目を向けたわ。
一面に、透き通るようなきれいな空が広がっていた。
「なんか、良い事がありそうな予感がしてきませんか？」だって。

彼女のわくわくするような口ぶりに、私は思わず笑みがこぼれたわ。
そして、少しだけ涙を浮かべた。

彼女が病室を立ち去ってからも、
私は、四角く区切られた空を飽きもせずにずっと眺めていた。

じきに、私が意識を取り戻したと連絡を受けた両親が昼食を切り上げて、大急ぎで病室に駆け付けて来るわ。
慌て者の、お父さん。
お願いだから、頬にご飯粒なんてつけて来ないでね。
私なら、いくらでも待ってあげるから。
本当よ？
今は、退屈もしてないの。
家族とか、まだ遊び足りなかった場所とか、連続ドラマの続きとか、そういう死ぬ前に惜しくもあきらめて、
もう金輪際ないと思っていたものが頭に浮かぶとね、
そうか、チャンスはまだあるんだってことに気付いて、だんだんうれしくなってきたの。

生きてて、よかったあ、なんて実感しちゃってる。

それに一度、死んだからかしら。
新しく生まれ変わって、何でもやれそうな気がするの。

気がする、だけなんだけどね……。
あの世から生き返ったといっても、私は私なんだし。

現実は、やっぱりうまくいかないことだらけでしょ？
いったん落ち込んで、以前の私に逆戻りしてしまったら、
暗い気持ちをまたずるずるとひきずるようになって、結局は、いやいや生きていくことになりそうだもの。

それだけは、ごめんだわ。
あんな日々は、もううんざり。
未来なんてなければいいのに、ってさえ思う。

そうだ。

右手が自由に動くようになったら、生命線にまた傷をつけよう。
例の傷跡の少し下あたりに。
そうすれば、変なところで力んでしまうのが常である私も、少しは肩の力を抜いて楽に生きられるかもしれないわ。

そうね。
これって、異常……かしら？
私的には、ナイス・アイディアだと思うんだけど。
だって、もうすぐ死ぬという切迫的状況にあれば、物事に対して不思議と積極的になれることもあるだろうし、
苦手なおとなりさんと出会っても今度は硬まらないで、
「怖がらないで、聞いてください」
って、ぎこちないかもしれないけれど笑顔で、ちゃんとお礼を言えそうな気がするわ。
それに、以前みたいに掌の長い生命線にさいなまれて、苦しみは永遠に続くものだなんて不安がることもないの。

死神に付きまとわれるのは、癪だけど……。
でも、私を担当する死神ならちょっとは安心できるかな。

だって、私を見逃してくれたんだもの。
私みたいにドジじゃなければ、いい人に決まってる。

大丈夫、
大丈夫よ。

生まれたての私はあいかわらずドジで馬鹿だけど、たとえ失敗してもうまくいかなくても、
生きているかもわからない先の未来に怯えることなんてないんだから、
将来のことでいちいち悩む癖は捨てて、私はただ一日一日を楽しむ気持ちで、今しかない《この時》を大事に踏みしめながら生きていけばいいわ。
幽霊になってから、やっておけばよかったなんて後悔したくないものね。

弱くたって、
無理して前に進もうとしなくたっていいんだ。
たとえ、ここから這い上がれなかったとしても、
私は、私のままに、生と死のはざまを歩いてゆく。

幸せの光は、きっと、谷底にも降りそそいでくれるでしょ？

第七話　私の選んだ道（その２）（後書き）

終わってしまいました。寂しいものですね。
読んでくれたみなさま、ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9512g/

生命線に傷ひとつ

2010年10月8日15時14分発行